

経済を見る眼

「今週の眼」

川本裕子

早稲田大学大学院ファイナンス研究科教授

かわもと・ゆうこ ● 東京大学文学部卒、英オックスフォード大学経済学修士。マッキンゼー勤務を経て、2004年から現職。トムソン・ロイター社トラスティ理事。大阪証券取引所自主規制委員会委員長などを務める。



撮影：吉野純治

められるのは当然の流れだ。基地問題での前進はもちろん、TPP（環太平洋経済連携協定）への参加問題への決断は待たなしの状況となるだろう。ここでもリーダーとしての見識、指導力が求められる。論文からは、こうした局面で新首相がどう対処するのかについて予想するのはまだ難しい。一点気になるのは、自由と平等という二つの価値をどうバランスさせるか、という野田氏の「中庸」の考え方だ。社会主義的統制の束縛が重い社会では右足（「自由」）を踏み出すべきだが、今の日本は中間層の厚みを取り戻すため、左足（「平等」）を踏み出すべき時だと新首相は説く。しかし、その例えを借りるなら、今の日本は左足だけでなく右足も元気に踏み出し、前進することがいかに大事なことはないか。労働規制の強化や公的金融の野放図な拡大、さまざまな分野での参入規制の残存など、日本経済の「社会主義的束縛」の影は依然色濃い。中間層の厚みを取り戻すためにこそ、現役世代が活力を発揮できるよう新規参入の自由を拡大すべきである。左足だけで無理に前進しようとしているのが日本の現状だ。右足も忘れずに、バランスを取って前進してほしい。

野

田新政権が発足した。2006

6年以來、首相が1年間で交代する、国際的にも異常な事態となっている日本。民主党にとっては政権交代後3人目の首相で、もう後がない。「三度目の正直」と同じ意味で英語にもThird time luckyという表現があるが、5年を数えるデッドロック状態を打開してほしいというのは国民の切実なる願いだ。

野田総理の政治哲学が先日総合誌に発表された。全体に、過剰なイデオロギー色を持たず、日本に生まれてよかったという国にしたい、というわかりやすい目標を掲げ、しかも、日米関係が基軸、国民や官僚に耳障りなことでも責任を持って断行する、と明言している。具体的な政

策について過剰なコミットメントを避けつつ、復興、原発、経済再生、財政再建など、重要なポイントには漏らさずに突いている印象だ。

前2政権が普天間基地移転や消費税増額など、初期段階で政策の基本的な枠組みにかかわる部分で政権運営にまずいたことを反省してか、派手なパフォーマンスは避け、党内コンセンサスを重視、低姿勢、実務的アプローチを重視しているように見える。有名な政治家ファミリーでも市民運動出身でもない、「普通の人」が首相となり、その安定感が党への支持を反転させたようだ。

失われた20年は日本の政治家がやるべきことを先延ばしにしてきたため、との英「エコノミスト」誌の指

摘も率直に受け止めるなど、オープンな対外姿勢は過去2年の民主党政権が生み出してきた無用の国際不信を回復するためにも有益だろう。

しかし、ハネムーンはいつまでも続かない。国民が求めるのは成果である。「腰だめ」でなく、国民にとって説得力ある増税提案を行うには、歳出の削減も当然必要となる。その場合、野田論文が指摘する「行政のムダ」削減なら反論は出にくい。それでも削減額が不足すれば、歳出の優先順位を決めていくことは不可避だ。党内融和をどう図るのか、首相としての政治手腕が問われる。

また、日米関係基軸を打ち出したことは評価されるが、宣言だけで済むほど事は単純ではない。結果が求

められるのは当然の流れだ。基地問題での前進はもちろん、TPP（環太平洋経済連携協定）への参加問題への決断は待たなしの状況となるだろう。ここでもリーダーとしての見識、指導力が求められる。論文からは、こうした局面で新首相がどう対処するのかについて予想するのはまだ難しい。一点気になるのは、自由と平等という二つの価値をどうバランスさせるか、という野田氏の「中庸」の考え方だ。社会主義的統制の束縛が重い社会では右足（「自由」）を踏み出すべきだが、今の日本は中間層の厚みを取り戻すため、左足（「平等」）を踏み出すべき時だと新首相は説く。

しかし、その例えを借りるなら、今の日本は左足だけでなく右足も元気に踏み出し、前進することがいかに大事なことはないか。労働規制の強化や公的金融の野放図な拡大、さまざまな分野での参入規制の残存など、日本経済の「社会主義的束縛」の影は依然色濃い。中間層の厚みを取り戻すためにこそ、現役世代が活力を発揮できるよう新規参入の自由を拡大すべきである。左足だけで無理に前進しようとしているのが日本の現状だ。右足も忘れずに、バランスを取って前進してほしい。

野田総理、「右足」も忘れずに